

# 詩人における詩論とその実践

——萩原朔太郎の場合——

重 吉 武

## 序

詩人は、詩を創作する時、詩のあり方についてふかく考察し、自己の詩のあり方を自覚する。その考察され自覚された詩の概念、これが詩人の詩論である。わたくしがここで詩論というのは、書かれたるものも、書かれずして詩人の脳裡にうずまいていたものもふくめているのである。

詩論は、その取り扱い方によっていろいろに分けることができるであろうが、詩論がなされる動機についていえば、

一、詩人が、すぐれた詩を生みだしたいという欲求を満たすために、詩と詩精神の本質を見つめようとする場合。

二、自己の詩を含めて、詩と詩人に対する正しい理解と価値とを要求する場合。

三、詩や詩人についての論者の要求を満たすためだけでなく、批評としての詩論、いわば芸術論としての詩論を目的としてなされる

## 場合。

の三つの場合に分類されよう。これらは、それぞれ無関係に孤立してあるのでは無く、多くの相関性を持つものであるが、(一)は主として詩作する人の場合にいえることで、この場合、より高度な、より普遍的な詩精神から真の「詩」が生み出されるものであることを自覚し、詩人としての自己の要求を見つめることが目的となっている。(二)は、他の人々に比較して、詩をより正しく理解し得ているとの自覚が前提条件となっており、自己以外の人に詩情とか詩精神、詩と詩人の意義および価値を認識させようとするのが目的となっている。(三)は、主として研究としての詩論が要求される場合で、もっとも普通の形態における詩論であり、(一)と(二)を詩のための詩論であるというならば、(三)は、詩論のための詩論であるといえよう。詩人にあつても、(一)の場合が、自己以外の人を意識することが、より少ないものであるために、自己の要求のひろがりに応じて、(一)から(二)へと進んでいく。(一)と(二)は、詩人にとっては、要求の段階としてあらわれるものと言えよう。しかし、(一)の場合においては、詩その

ものが詩論としての意味を持つ場合もあり、文字や言語の媒体を通して構成された(二)の場合の詩論に比較すると、よほど他人への意識が乏しいと考えられるから、この点の識別がなされねばならない。

現在までに、多くの詩に対し、多くの詩論がなされているが、本質的な問題として、詩が詩論をどこまで必要とするかという疑問がある。この疑問について、今ここでは述べない。これからの考察において、当然わたくしなりの結論が見出されると思うからである。ここではただ、「詩論は、当然要求されるべきものである。」とっておこう。その理由は、詩とはいかなるものであるかの問題が、ながい間にわたって論議され研究されつづけられ、その過程において、つぎつぎと異なる詩の表現形態や理念が生まれているからである。詩は「叫び」であるとか、人はすべて本能的に詩につながるころを持つているとか——(この点についていえば、人は生来詩情を持つていてではない。詩情とは、内部においてすでに構成されたものであり、言語による表現の前段階のものである。すべての人が持つているのは、詩情以前の詩情的飛翔とでもいえるもので、詩以外のどの芸術に対しても展開可能な生命の律動にはかならない。とわたくしは考える。) —、詩は感動をこぼして表現した音楽であるとか、多くのことがいわれているが、こうした論議は、ある一点に至ると、もはや人生の問題をさしおいては論じられないように思われる。詩も人生にうらづけられてのみ認められるのであるが、しかも人生論は、われわれにとって難解かつ重要な問題としてある。

詩人は、有形無形に詩論を構成しながら詩を書きつづけてきた。本稿においては、萩原朔太郎について考え、詩人が詩について何を

感じ、何を見つめ、いかに思念してきたかをたどりながら、詩と詩論の吻合点を詩精神の中に求め、かれが詩論を詩にどのように実践しようとしたかを見ていきたいと思う。

### 萩原朔太郎の詩論の位置

わが国の詩人で、朔太郎ほど多くの詩論を書いた詩人は少ないだろう。かれ自身、みずからを「詩論家」と呼んでいる。また、かれほど自己の詩に神経質であった詩人も少ないだろう。このことは、かれが詩論家としての自己を意識したためとも考えられるが、同時に、かれ自身の中にある詩に対するはげしい欲求と、かれの特異な性格のせいとも考えられる。かれの詩論は、その動機からみれば、前に述べた三つの場合の、第二の場合に属する。朔太郎の詩論の核心をなしている「詩の原理」(一九二八年)序に、詩が文壇からひどく迫害されていることを強調し、

単に詩壇が詩壇として軽蔑されてゐるのではない。何よりも本質的な、詩的精神そのものが冒瀆され、一切の意味で「詩」といふ言葉が不潔に唾かけられてゐるのである。我々は単に、空想、情熱、主観等の語を言ふだけでも、その詩的の故に嘲笑され、文壇的人非人として排斥された。

と述べ、「虐げられた詩人たち」が切支丹の信者のごとく、その芸術を守るために「秘密な信仰」を持ちつづけねばならなかったことを述べている。かれの見解は、多分に誇張とも受け取れるが、かれの考えからすれば、健全な詩の発育が見られず、詩人が詩について

懷疑をくりかえし、「詩は正に亡びつつあるのではなからうか。」と絶望的な考えを持たずにはいられず、詩と詩壇についてより深い理解を求め、詩壇の「啓蒙」を求めるために、詩論を書こうとしたのである。一九三八年、「詩の原理」を再版するにあたって、「私がこの書を書いたのは、日本の文壇に自然主義が横行して、すべての詩美と詩的精神を殺戮した時代であった。その頃には、詩壇自身や詩人自身でさへが、文壇の悪レアリズムや凡庸主義に感染して、詩の本質とすべき高邁性や浪漫性を自己感殺し、かえって詩を卑俗的デモクラシーに散文化することを主張していた。したがってこの『詩の原理』は、かかる文壇に対する挑戦であり、併せてまた当時の詩壇への啓蒙だった。」とことばを補っている。詩に対するこれらの欲求と情熱は、詩的精神こそ芸術の本質と信するゆえに、「秘密な信仰」をつづけるには強すぎ、堪えられないものであったのである。

#### 天上縊死

遠夜に光る松の葉に、  
懺悔の涙したたりて、  
遠夜の空にしも白ろき、  
天上の松に首をかけ。  
天上の松を恋ふるより、  
折れるさまに吊されぬ。

（「月に吠える」一九一五年）

この詩にあらわれている、詩的精神に殉じようとする朔太郎の心は、どうかして自分の持っている意識と力を高め強めることによって、多くの人間や自然が持っている共通性を発見し、その共通性から生まれる「道徳」と「愛」とによって孤独からのがれたいとい

う、詩的精神を凝視するような「祈禱」であった。詩人であることが自覚すればするほど、冒瀆された詩的精神に「懺悔」しなければならぬ体のものであったのである。

#### 反自然主義の意識

こうして、朔太郎の詩論の形成と深い関係を持つ、自然主義に対するかれの意識を考えてみる必要がある。

自然主義の文学運動がおこった当時の詩壇をみると、自然主義文学が「横行し」はじめた一九〇六年島崎藤村の「破戒」出版の頃から、朔太郎の最初の詩集「月に吠える」が出版（一九一七年）されるまでの期間に、「有明集」（一九〇八年）「邪宗門」（一九〇九年）「食ふべき詩」（同）「道程」（一九一四年）など、現在までわが国の詩の中核的位置を占めるとされる詩集が出版されている。

「海潮音」が出版されたのも一九〇五年である。新詩体から出発した日本の近代詩が、歴史的に見て一つの頂点に達したと考えられるこの時期に、朔太郎は、もとより頂点を見なかつたのであるが、こうした詩の発展を見て、さらに何がいたかつたのであろうか。

「詩の原理」が出版されたのは一九二八年であるが、この論の根本的思案が形成されたのはそれ以前にさかのぼる。それは、

本書を書き出してから自分は寝食を忘れて兼行し、三ヶ月にして脱稿した。しかしこの思想をまとめる為には、それよりもずっと永い間、殆んど約十年間を要した。

と「詩の原理」序に序べていること、かれが筆生犀星とともに出版した雑誌「感情」（一九一六——一八年出版）の予告に本書の広告

を出していることから、「月に吠える」が出版される前後のことであることが知れる。少なくとも、自然主義への「挑戦」は、かれの本格的詩作がなされるころからであることは、前掲の詩にもうかがえる。とすると、詩壇が活光に輝きつつある時代ではあったが、朔太郎にとっては、自然主義小説が世に迎合されることきわめてめざましいものであったがために、この点で、詩が小説に対抗しえないことを嘆き、「挑戦」の意識を深めずにはいられなかったのである。

詩はいつも時流の先導に立って、来るべき世紀の感情を最も鋭敏に触知するものである。されば詩集の真の評価は、すくなくとも出版後五年、十年を経て決せらるべきである。五年、十年の後、はじめて一般の俗衆は、詩の今現に居る位地に追いつくであろう。即ち詩は、発表することのいよいよ早くして、理解されることはいよいよ遅きを普通とする。かの流行の思潮を追って、一時の浅薄なる好尚に適合する如きは、我等詩人の卑しみて能はないことである。

詩が常に俗衆を眼下に見くだし、時代の空気に高く超越して、もつとも高潔清廉の氣風を尊ぶのは、その本質に於て全く自然である。

これは、かれの第二詩集「青猫」（一九二三年）の序に書かれたことばである。かれが何故に自然主義文学を否定したかを知る一の資料となるとともに、かれの詩論の方向意識がようやく安定性を示してきていることを知りうる。かれは小説を否定しているのではない。「詩の原理」の内容論第十四章「詩と小説」に、「小説はたしかに俗衆的であるけれども、（詩に対して）芸術として本質上で

は、必ずしも俗衆主義のものではない。」と述べていることからしれるし、「俗衆」と呼ぶ民衆に対してもそれを否定的に見ていないことは、同書第十五章「詩と民衆」において、「現時の日本に於て、真に詩的精神を有するものは、ひとりただ民衆あるのみ。」とか「その稚氣と俗臭にかかわらず、民衆は常に健全であり、芸術の正しき道を理解している。」とか述べていることからもしられる。かれが挑戦したのは、「いたづらに辞句の小技を玩弄彫琢し、宗匠的倫安を能とした」日本の自然主義そのものだったのである。「美とイメージと情緒と飛躍を本質とする詩」に対して「これをすべて虚妄（非現実のもの）として排斥した」日本の自然主義は、かれからいえば、悪レアリズムであった。（「日本への回帰」の「自然主義を離脱せよ」参照）

いのちは光をさして飛びかひ  
光の周囲にむらがり死ぬ

ああこの脈はしく 艶めかしげなる春夜の動靜

露っぼい空気の中で

花やかな弧燈は眠り 燈火はあたりの自然にながれてゐる。

ながれてゐる哀傷の夢の影のふかいところで

私はときがたい神秘をおもふ

萬有の 生命の 本能の 孤独なる

永遠に永遠に孤独なる 情緒のあまりに花やかなる。

「青猫」中の「花やかなる情緒」の一章である。「夜ふけてかがやく弧燈をゆめみ」てその光にあこがれ、春夜の花やかな情緒にふしぎな性の悶えを感じて、飛びかひ、翼をばたつかせ、ついに空しくむらがり死んでいく蛾のように、人間の本能と生命にねざすく

るおしいまでの夢とあこがれは、人の心を真に満たすことはない。その深層部で、いつまでも空しく燃えて満たされない永遠の孤独を思ふばかりである。ふしぎな、しかも花やかな、神秘的情緒を思ふ朔太郎のロマンチズムは、自然主義とはとうていあい入れるものではなかつたのである。

### 予感の実現

「月に吠える」出版当時の、かれが「時流への叛逆」と呼ぶいびつさは、やがて、次第に影をひそめる。「青猫」の前掲の序文にもうかがえるが、「月に吠える」再版序（一九二二年）に述べているごとく、かれの詩集が多くの読者に歓迎され、当初の意志をまげてまで再版しなければならなくなつたことから得た喜びと、さらに「青猫」を出版するまでの自信を得たことによるのであろう。「月に吠える」再版の序に「私等は流行の裏を突破した。（中略）然るに幾程もなく時代の潮流は変向した。さしも暴威をふるつた自然主義の美学は、新しい浪漫主義の美学によって論駁されてしまつた。」とも「二度我が敘情詩の時代がきた。」「私等の雑誌「感情」は、詩壇の標準時計となつた。」「すべてが私の予感として現実とされている。」とも述べているのも、かれの喜びと自信の大きさが知られる。詩が万人に理解されるものでなくても、かれの抒情詩を理解する人がそこにいる。詩作する生活は孤独であれ、その詩は孤独からのがれたのである。前掲の「花やかなる情緒」の詩は、かれが詩の本質と見なしている「情緒」を詩に実践したものであり、かれの自信と喜びとが結句のことに強く感じられる。「純情小曲集」

（一九二五年）の「郷土望景詩」に、

#### 小出新道

ここに道路の新開せるは  
直として市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方の地平をさわめず

暗鬱なる日かな

天日家並の軒に低くして

林の雑木まばらに伐られたり。

いかなぞ いかなぞ思惟をかへさん

われの坂きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。

がある。一九三七年に出版された詩論「詩人の使命」の「現代と詩精神」にこの詩を引用して、「久しぶりで郷里に帰つた私は、昔少年時代に散歩した森や林が、すっかり跡方もなく伐採されてるのを見て、或る生々しい悲痛の感慨に打たれながら、この抒情詩を作つたのです。この詩で歌つてゐることは、過去の懐かしい夢や記憶が、無残に皆破壊されたことの悲哀と、その悲哀を噛みしめながら、社会に孤立して独り考へ、時代の流行思潮に逆行し、現実の世相を呪ひながら、しかも尙愚かな夢を持ち続けて、寂しい戦ひを生活して来た私の過去を多少悲憤の調子で叫んだのです。」といひ「私が過去に否定して来た一切の流行思潮とジャーナリズム——自然主義や、人道主義や、民衆主義や、マルキシズムや——が、次々に起つて次々に廃れ、結局皆虚妄の幻影として、痛快に伐り倒されてしまつたことを寓したのです。」と説明していることを考えれば、当時のか

れの心が明白に知られる。この詩を同詩集および「青猫以後」序文に引用していることは、かれのそうした意図を考えあわせて、詩論の實踐の態度を知る上に重要なことであろう。

### 性癖としての叛逆

流行思潮に対するかれの挑戦の遠因となっているもの、「小出新道」をはじめ、かれの詩を理解するに重要なものとして、かれの性癖と、それを培った少年時代からのかれの生活が問題となる。「純情小曲集」の「出版に際して」に、

郷土！ いま遠く郷土を望景すれば、萬感胸に迫ってくる。かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんでゐた。単に私が無職であり、もしくは変人であるといふ理由をもつて、あはれな詩人を嘲罵し、私の背後から唾をかけた。「あすこに白痴が歩いて行く。」さう言つて人々が舌を出した。

少年の時から、この長い時日の間、私は環境の中に忍んでゐた。さうして世と人と自然を憎み、いっさいに叛いて行かうとする、卓抜なる超俗思想と、叛逆を好む烈しい思惟とが、いつしか私の心の隅に、鼠のやうに巢を食つていった。

とあるのは、朔太郎の時代への叛逆意識が、ただ単に観念的に生じたものでないことを示している。かれの性格については「廊下と室房」（一九三六年）の「私の孤独癖」にみずから語っている。かれの家庭が土地の旧家で、上流家庭に属し、幼年時代から親や祖父母に近所の子供たちや学校の級友と遊ぶことをいましめられていたため、友もなく、かえつて、他の子供たちからいじめられることも多

かった。そのためかれはつねに人をさげ、おびえて逃げまわつていたのである。青年時代には詩を志望する青年たちが訪れるようになったが、かれらとの会話も家人にはばからねばならず、自由ではなかつたらしい。こうした生活の繰り近しが、いびつな、ものにおびえる暗い性癖——これを「病氣」と呼んでいる——を一生持ちつづけねばならなくなったのであろう。「月に吠える」犬、それは、かれのこうした性癖より生まれたものであって、自分の影に怪しむ恐れで吠えるのである。宿命づけられた病氣のような、きわめて神経質で鋭敏に働く感覚と、そこから生ずる孤独感とはつねにかれを苦しめつづける。それは、癒えることを知らない病氣としてかれの身体の中でいつも刺激されるたびに——どんな小さな刺激にでも頭をもたげる。日常生活においてはもちろん、思考している時も、詩作する時も。空間の世界において、かれはつねに意識の中でこの病氣と対座していた。不治の疾患を癒そうとする苦しみ。そこでかれは逃れることを考える。この苦しみのない世界を求めて、むなしく逃行をつづける。

ああ、どこまでも、どこまでも

この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる、

きたならしい地べたを這ひまはつて、

わたしの背後で後足をひきすつてゐる病氣の犬だ、

とほく、ながく、かなしげにおびえながら、

さびしい空の月に向つて遠白く吠えるふしあわせの犬のかけだ。

これは「見知らぬ犬」の最後の一章である。この詩で朔太郎はいう——「ああ、わたしはどこへ行くのかしらない。」と。行きたい

所はあつても、心の安住できる所はないのである。かれの足はいつも意志にさからつてゐる。

わたしのゆく道路の方角では、

長屋の家根がべらべらと風にふかれてゐる、

道はたの陰気な空地では、

ひからびた草の葉っぱがしなしなとはそくうこいて居る。

とあるように、目に入るものは、不具の犬を一層いびつにするようなものばかり。そして、自己の姿は「見もしらぬ」みすばらしさ、病気でしかもおびえ、「青白い幽霊のやうな不吉な謎」のごとき月にむかつて「ばぶばぶ」と吠える、ふしあわせな大きなからである。この悲哀と苦惱とは、一生、朔太郎の背後につきまとう。「私は自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、後を追つて来ないやうに」。とかれは言う。異状に鋭いかれの神経は、この影のように、見てはならぬものまでを見、感じてはならぬものまでを感じた。そのためにかれの情欲は満たされるのではない。むしろ、あるものは「干からびた犯罪」（「月に吠える」）に見られる屍体のような、むなしく冷えきった「さびしい情欲」である。それは、やがて情欲の追求に疲れた憂鬱へとかわつていく。これらのものから一時も解放されることのない心が、かれのいう「病氣」なのである。

### 詩の本質観

自己のめざす詩の方向について認識を得んがために、あがき苦しみつづける心、そのかれの心がひたすらに描きつづけた理念は、か

れを孤独にし、かつ悲哀の多くを与えながらも悲哀の深層において、かれが正しい道標をみつめてゐるといふ喜びを与えていた。ながい間、ひたすらに持ちつづけたむなしの抵抗は、その喜びを得るためのものでもあったが、かれがこのように信じて心に描きつづけた詩精神はどのようなものであったか。かれが詩に求めていたものはどのようなものであったか。「月に吠える」序において

私どもは時々、不具な子供のやうないぢらしい心で、部屋の内片隅にすすり泣きをする。さういふ時、びったりと肩により添ひながら、ふるふる自分の心臓の上に、やさしい手をおいてくれる乙女がある。その看護婦の乙女が詩である。

私は詩を思ふと、烈しい人間のなやみとそのよろこびとをかんずる。

詩は神秘でも象徴でも鬼でもない、詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

詩を思ふとき、私は人情のいちらしさに自然と涙ぐましくなる。

と述べ、「青猫」の序でも、詩は、神秘や信仰や生命がけの仕事や神聖な精進の道でなく、「詩はただ私への『悲しき慰安』にすぎない。生涯の沼地に鳴く青鷺の声であり、月夜の葦に暗くささやく風の音である。」と述べていることから知るやうに、かれが詩の本来の目的とするものは、「慰め」と呼ばれるものであった。悲哀と苦悩につつまれた人間生活における「慰め」は、朔太郎によつてのみ求められたものではなく、芸術とよばれるすべてのものに共通する唯一の目的であろうが、人がそれを受受する時の価値観と形態とは、個々人の欲求により異なるものであろう。では、朔太郎の求

めた一乙女のやさしい手」のような、「青鷺の声」のような、「葦の葉にささやく風」のような慰みは、どのように説明されるべきものであろうか。かれはつぎのように言う。

詩の表現の目的は単に情調のための情調を表現することではない。幻覚のための幻覚を描くことでもない。同時にまたある種の思想を宣伝演説することのためでもない。詩の本来の目的は寧ろそれらの者を通じて人心の内部に揺動する所の感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかんに流露させることである。

これは、詩の表現の本来の目的が感情を対象としており、その感情がより深められたところに形象されるものであるといっているのである。そして、「私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や『ことば』ではなくして、内部の核心である感情そのものに感觸してもらひたいことである。私の心の『かなしみ』『よろこび』『さびしみ』『おそれ』その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによって表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。」(同上)と説明している。これはさらに「自分の背後に隠れて居る」(青猫)という詩に、判然と興喪されているのである。この詩ほど朔太郎の詩的感情を単純な形式——段階を踏んでいるという意味で——において順序よく歌っている象徴詩は少ない。

おとなの知らない希有の言葉で

自然は彼等をおびやかした

僕等は葦のやうにふるへながら

さびしい曠野に泣きさげんだ。

「お母ああさん！ お母ああさん！」

子供のたよりない感觸では「わづかな現はれた物しか見えはしない」ために、藪かげの地面に「およおよ」とおよく月影を見、「さびしい葉ずれの隙間から鳴る、そわそわという小笛」のような「風の声」を聞くと、われわれが幼年の時代に経験した幻聴や虚像を思う。一自分の背後に隠れて居る、なにかの妖し相貌（まぶた）に見える魔物の迫れる恐れをかんじ、て、黒い足音のような風におびえふるえつづける葦のように、恐怖と寂しさに泣きさげぶ子供の心である。この子供の心のように、「おそれ」「かなしみ」「さびしみ」を単純に感じとる心こそ、偽りのない、より本能的でより生命的な詩精神と呼ばれるもので、朔太郎が詩情の本質とみなしているものであった。その感情が葦のやうにふるえつつ、小笛のやうなりリズムをもつて読者の心に響くのである。詩情が読者の心を与える「慰め」は、かかるリズムカルな響きによるものであるが、この点について朔太郎は、

すべてよい抒情詩には、理窟や言葉で説明することの出来ない一種の美感が伴ふ。これを詩の「ほひ」といふ。(中略)「ほひは詩の主眼とする陶酔気分の要素である。順つてこのほひの稀薄な詩は、韻文としての価値のすくないものであって、言はば香味を欠いた酒のやうなものである。かういふ酒を私は好まない。詩の表現は素朴なれ、詩のほひは芳純でありたい。(「月に吠える」序)

と述べている。すなわち、「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」などが、かれの心（ほひ）にふれ、かれの心をふるわせるやうな芳純な「ほひ」、——詩の持つ音楽性が生む心の美しい響きともいいうる——こそかれの詩精神によって説明される美感に他ならな

かった。芳純な香氣によってかれの心は陶醉気分ひたることができ、かれの心は慰められるのである。「酔」と「香氣」と、ただそれだけの芳烈な幸福を詩歌の「最後のもの」として、かれは決定する。「私の情緒は、激情といふ範疇に属しない。」とかれがいっているのも、こうした詩論によるのである。かれの情緒は、「しづかな靈魂の、すたろぢやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきであった。」すべての「官能的なものは、決して、私の詩のモチーフでない。それは主音の上にかかる倚音である。もしくは、裝飾音である。私は感覚に酔ひ得る人間ではない。私の真に歌はうとする者は……あの艶めかしい一つの情緒——春の夜に聴く横笛の音——である。それは感覚でない。激情でない、興奮でない。ただ静かに靈魂の影をながれる雲の郷愁である。遠い遠い実在へのあこがれである。」とも述べている。「花やかなる情緒」の詩において、「ながれてゐる哀傷の夢の影のふかいところで、私はときがたい神秘をおもふ」と歌っているが、かれの「酔」と「香氣」をただよわす情緒は、まさに「ながれてゐる哀傷の夢の影」のようなものであった。「詩の原理」の「詩の本質」において、

夢とは何だらうか？ 夢とは「現在しないもの」へのあこがれであり、理智の因果に法則されない、自由な世界への飛翔である。

……そして詩が本質する精神は、この感情の意味によって訴へられたる、現在しないものへの憧憬である。

と述べているように、かれが所有していないもの、それにあこがれる夢が、かれの真の詩精神であった。かれの郷愁も、過去においてすでにかれが失ったもの、過去において夢見つづけた楽しい人生へのあこがれであった。現実の生活は、悲哀と苦悩と憂鬱との他

には何も無いように思われても、朔太郎の心は詩情を思念することによってのみ慰められる。かれの求める情緒によってその心が満たされた時、はじめて朔太郎の心は輝くのである。詩的情緒に満たされた心、これがかれの夢み、あこがれる光であった。この光は、朔太郎に希望を与えはするが、詩を信ずるかれの心にとっては、「実在」でこそあれ、「遠い遠い」「現在しないもの」であるがために、それを求めることは苦行であった。坂んでも坂んでも、なお遠い夢は、朔太郎を憂鬱にし、さびしい悲哀を感じさせたのである。自分が今までに歩んできた過去を思い、自己の道の正しさを信ずることが、そのまま、かれのいう「郷愁」であったのである。

## 結 語

本稿において、わたくしは、朔太郎の詩と詩論の吻合点をかれの詩精神の中に求め、朔太郎の詩論の位置づけ、詩的精神のあり方を考えた。かれの詩論の実践については、他の機会にさらに具体的に述べたいと思う。詩における象徴の問題、苦悩・郷愁・懷疑などの問題、また青年性の問題など、外くの問題が残されているのである。

(広島市立工業高等学校教諭)